様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３４５１７
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１３０３４

研究課題名（和文）妊産婦の自殺予防に向けた死への不安・恐怖に関する総合的発達モデルの構築

研究課題名（英文）Construction of integrated developmental model of fear of death for suicide prevention among expectant or nursing mothers

研究代表者
田中　美帆（TANAKA, Miho）

武庫川女子大学・文学部・助教

研究者番号：８０８０２６７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，妊産褥期の死への不安・恐怖に着目し，妊産婦の自殺関連因子との関連を明らかにすることを目的とした。研究1の結果から、母親の認識する子どもとの関係構築経験は，「日常経験」，「初接触経験」，「身体経験」，の大きく3つのまとまりによって把握でき，死の未知性への恐怖である死への不安・恐怖，死の関係性喪失への恐怖である生への執着に正の影響を及ぼしていることが明らかになった。加えて，コロナ禍に実施された研究2では，死への不安・恐怖，生への執着は，調査開始時に妊産褥期のいずれの時期であるかに関わらず，コロナ禍中の得点がコロナ禍前の得点よりも高いことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来，死生観研究においては自分の死が重視され，関係性の視点が重視されてこなかった。また，妊産婦の自殺関連行動に関する社会的要請は高いが，実態把握は始まったばかりであり，縦断研究をもとにした検討は必ずしも十分ではない。さらに，新型コロナウイルスの感染拡大下を前後した縦断データを取得できており，分析結果の社会的インパクトは大きい。本研究は，関係性の視点を踏まえた死生観と自殺関連因子との関連をコロナ禍前後に検討し，その発達的軌跡を明らかにしたという点に学術的，社会的意義を有するものといえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was a cross-sectional and a longitudinal study was conducted to examine to Relationship between fear of death and risk factor associated with suicide in pre- and postpartum women under COVID-19 pandemic. Study 1 revealed that cluster analysis of mother-infant relationship-building experiences revealed three clusters: Everyday experience (e.g., fetal movement, feeding), First experience (e.g., awareness of pregnancy, the baby’s first cry), and Bodily experience (e.g., ultrasound examination, labor). Multiple regression analysis revealed that "awareness of pregnancy" had positive relationships with "fear of death," and "concern for others after death." In addition, Study 2, a longitudinal study conducted under COVID-19 pandemic, revealed that scores for "fear of death" and "concern for orhers after death" were higher under COVID-19 pandemic than during the prior COVID-19, regardless of whether the woman pre- and postpartum women at the start of the study.

研究分野：生涯発達心理学

キーワード：妊産婦　自殺予防　死生観　縦断研究　自殺関連因子

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2017 年度の自殺総合対策大綱で初めて妊産婦の自殺についての対策が打ち出され (厚生労働省, 2017)，その社会的関心が高まっている。しかしながら，国を挙げた全容把握は始まったばかりであり，妊産婦の自殺関連行動に関する研究の蓄積は乏しい (竹田, 2017)。特に，自殺関連行動の機序において死への不安･恐怖の低下は自殺の企図に影響するが (Joiner et al., 2009)，妊娠期を対象とした死への不安･恐怖は検討がなされていない。

以上の問題意識のもと，これまで妊娠期および育児期の死への不安･恐怖を含めた生と死に対する態度を測定する尺度を開発し, その様相や影響要因を検討してきた。現在までに得た知見は，以下の３つである。第一に，育児期は「子どもが困るから死んではいけない」という関係性喪失への恐怖を持つ (田中, 2013)。第二に，これまで理論提唱にとどまっていた死への不安･恐怖の 2 側面である未知性への恐怖 (死という未知のものへの恐れ) と関係性喪失への恐怖 (Kirkpatrick, 1999) について，妊娠期･育児期では他の発達段階と本質的に異なり (田中･齊藤, 2016)，これらに影響する要因も異なる (田中, 2016; 田中, 2014)。第三に，妊娠期において，未知性への恐怖は低下する一方で関係性喪失への恐怖は上昇する (田中, 2017a)。

また，死への不安･恐怖に関する先行研究では，本人の死という個に焦点を当てており，関係性喪失への恐怖については十分に検討がなされていない。しかし, 妊娠期は母と子の生命が不可分であること，妊産褥期は胎動および出産･授乳など子との関係構築を短期間で経験することから，具体的な関係性構築経験が関係性喪失への恐怖にどのように影響するのかを明らかにすることで，より実態に即した妊産婦の死への不安･恐怖を捉えることが可能になる。さらに，妊産褥期は短期間で急激な心理変化を経験するため，妊娠前の既往歴に関わらず精神に不調をきたしやすい。妊産褥期の心身の問題は子どもの心身に対しても，長期的な影響を及ぼすため (e.g., Leis et al., 2013)，自殺関連行動に影響する死への不安･恐怖の詳細な把握は妊産婦のメンタルヘルスケアに寄与し，母子保健対策に資する基礎的資料を提案できる。

２．研究の目的

そこで，本研究では，これまでの成果を発展させ，妊産褥期の発達的特徴である子との関係性構築に着目し，死への不安･恐怖の発達モデルを構築し，妊産婦の自殺関連行動との関連を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

研究 1 では，子との関係性構築経験に着目し，死への不安･恐怖の特質とその影響要因を明らかにするため，206 名の妊産褥期の女性を対象とした質問紙調査を実施した。質問紙には，死への不安･恐怖を測定する尺度 (田中･齊藤, 2016), 関係性構築経験として, 妊娠期におけるつわり･胎動･出産，産褥期における授乳など，母子相互の働きかけを引き出す胎児シグナルや養育行動に関して “母子関係に影響を与えた世話や経験は何か”などの項目，デモグラフィック変数が含まれた。

研究 2 では，研究 1 を踏まえて，関係性構築経験や自殺未遂･希死念慮，自殺の対人関係理論 (Joiner et al., 2009) における危険因子である所属感の減退や負担感の知覚が，未知性への恐怖と関係性喪失への恐怖という 2 つの死への不安･恐怖にどのように関連しているのか，を縦断的に明らかにすることを目的とした。妊産褥期の女性を対象に，全 3 回の調査を実施した。全 3 回の調査に参加したのは 226 名，2 回の調査に参加したのは 421 名であった。質問紙には，①死への不安･恐怖を測定する尺度 (田中･齊藤, 2016)，②研究 1 の結果を元に作成した胎児シグナルと養育行動に関する項目，③負担感の知覚と所属感の減退を測定する尺度 (相羽他, 2016)，④希死念慮 (岡野他, 1996)，⑤自殺潜在能力(相羽他, 2016)，⑥ソーシャルサポート (Webster et al., 2000)，⑦シリアスネス・チェック (Aust, Diedenhofen, Ullrich, & Musch, 2013) が含まれた。

なお，本研究は，武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科倫理審査委員会の承認を受けた。

４．研究成果

研究 2 の開始直後に新型コロナウイルスが感染拡大したため，当初の研究計画から大きく研究計画を変更せざるを得なくなった。

（1）研究の主な成果

①子どもとの関係構築経験が母親の生と死に対する態度に及ぼす影響

本研究では，母親の認識する関係構築経験とその経験が生と死に対する態度に及ぼす影響について探索的に検討した。結果から，母親の認識する子どもとの関係構築経験が日常的な世話に関するもの，初めての接触や経験に関するもの，身体的な接触に関するもの，の大きく 3 つのまとまりによって把握できること，これらの関係構築経験のうち初めての接触や経験に関するものが死への不安･恐怖, 人生の目標, 生への執着に正の影響を及ぼしていることが明らかになった。なお，本研究は武庫川女子大学人間学研究会紀要である「人間学研究」に掲載された。

②妊産褥期の死への恐怖と自殺の対人関係理論における危険因子との関連

妊産褥期の女性の死への不安・恐怖を含む生と死に対する態度と自殺の対人関係理論 (Joiner et al., 2009) における危険因子である負担感の知覚と所属感の減弱，自殺の潜在能力との関連を検討した。分析の結果，妊娠期，産褥期ともに死の未知性への恐怖である死への不安・恐怖では負担感の知覚には有意な相関は認められず，所属感の減弱においてもほとんど相関が認められなかった。一方で，死の関係性喪失への恐怖である生への執着では，負担感の知覚，所属感の減弱ともに弱い正の相関が認められた。また，自殺の潜在能力と死への不安・恐怖との間にはやや強い正の相関が，生への執着との間には弱い正の相関が認められた。これらのことから，死への恐怖の中でも恐れる対象の違いによって自殺の対人関係理論における危険因子との関連は異なることが示唆された。なお，本研究は日本心理学会第 84 回大会で発表し，現在，投稿論文を鋭意執筆中である。

③コロナ禍における妊産褥期の自殺関連因子に関する縦断的検討

COVID-19 の感染拡大によって，世界中の人びとが生活スタイルの大きな転換を求められている。日本においても 2020 年 4 月から 5 月の第一波では，大規模な活動制限が行われ，活動制限に伴う孤立や感染への恐怖などを原因とした妊産婦のメンタルヘルスの悪化が報告されている (Matsushita & Horiguchi, 2020; Obata et al., 2021)。妊産婦の自殺関連行動には，不安障害やうつといったメンタルヘルスが関連しており，妊産婦におけるメンタルヘルスへのアプローチは自殺予防の観点からも重要である。そこで，コロナ禍における妊産褥期の女性の死への不安・恐怖と自殺の対人関係理論 (Joiner et al., 2009) における危険因子である負担感の知覚と所属感の減弱，自殺の潜在能力，メンタルヘルス，希死念慮について縦断的に検討した。結果から，所属感の減弱はコロナ禍において出産後であった調査開始時に産後 0-2 ヶ月の群において，コロナ禍中の得点がコロナ禍前の得点よりも高かった。また，死への不安・恐怖，生への執着は，調査開始時に妊産褥期のいずれの時期であるかに関わらず，コロナ禍中の得点がコロナ禍前の得点よりも高かった。他方，コロナ禍における妊産褥婦のメンタルヘルスやソーシャルサポート，希死念慮，自殺の潜在能力，負担感の知覚については調査開始時の妊産褥期および調査時期いずれの要因においても有意な差が確認されなかった。なお，本研究は日本発達心理学会第 33 回大会で発表し，現在，投稿論文を鋭意執筆中である。

④コロナ禍における産婦のメンタルヘルスと自殺関連因子――パンデミック以前と以後の比較検討から――

COVID-19 のパンデミックは，妊産婦のメンタルヘルスに悪影響を及ぼしている (Suwalska et al., 2021)。先行研究ではパンデミック下で妊娠，出産を経験した妊産婦はパンデミック以前の妊産婦と比較して不安やうつのレベルが上昇すること (Berthelot et al., 2020; Wu et al., 2020)，知覚されたソーシャルサポートが低下することも明らかにされている (Matvienko-Sikar et al., 2021)。さらに，このようなメンタルヘルスや知覚されたソーシャルサポートの悪化は自殺関連行動の危険因子と指摘されている (Orsolini et al., 2016; Reid et al., 2022)。そこで，産婦のメンタルヘルス，ソーシャルサポート，死への恐怖，負担感の知覚と所属感の減弱，自殺の潜在能力についてパンデミック以前と以後のデータを用いて探索的に検討した。結果から，不安障害に関するメンタルヘルス，生への執着，負担感の知覚はパンデミック以後に出産を経験した産婦の方が高く，自殺の潜在能力はパンデミック以前に出産を経験した産婦の方が高いことが示された。他方，先行研究で指摘されていたパンデミック下におけるうつ症状に関するメンタルヘルスやソーシャルサポートの悪化については確認されなかった。なお，本研究は日本心理学会第 86 回大会で発表し，現在，投稿論文を鋭意執筆中である。

（2）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

近年，死生学や自殺予防学においても他者との関係性をどのように捉えるのかが重要視され始めた。人の死生は関係性の上に成り立つため，関係性の視点の欠如は現実の死生との乖離を生じさせる (近藤・川島, 2016)。より実態に即した支援のためには，関係性の視点を踏まえた死生の研究が求められている。

これまで死への不安･恐怖は，主にその未知性 (「死というものがよく分からないから怖い」) に着目し，個の観点から検討されてきた (e.g., Templer, 1970)。しかし，「なぜ人はこれほどまでに死を恐れるのか」という死への不安･恐怖の根本的な問いに立ち返ると，未知性への恐怖だけでは説明ができず，「自分や近親者の子孫を世話ができなくなることへの恐怖」という関係性喪失への恐怖や (Kirkpatrick, 1999)，究極的には遺伝子が伝達できないという脅威への不安 (Boyer, 2001) といった関係性の側面を含んだものとして捉えられ始めている。しかしながら，これらの指摘は理論提唱にとどまっている。これまで妊娠･出産経験と生と死に対する態度の横断的な関連について検討してきたが，①関係性喪失への恐怖に影響する要因は何か，②未知性への恐怖と関係性喪失への恐怖はどのような変容プロセスをたどるのか，③これらが妊産婦の自殺関連行動や危険因子とどのように関連するのかについては未検討である。

また，新型コロナウイルス感染拡大下，とりわけ日本においても 2020 年 4 月から 5 月の第一波では，大規模な活動制限が行われ，活動制限に伴う孤立や感染への恐怖などを原因とした妊産婦のメンタルヘルスの悪化が報告されている (Matsushita & Horiguchi, 2020; Obata et al., 2021)。

一方で，コロナ禍以前に出産を経験した産婦とコロナ禍に出産を経験した産婦の間に EPSD の有意な得点差は認められないという報告もあり (三宅他, 2022; Takubo et al., 2021)，コロナ禍における活動制限における妊産褥婦への影響についての見解は一致していない。本研究では，研究 2 において，2019 年 10 月，2020 年 2 月，2020 年 5 月という第 1 波の感染拡大を前後した縦断データを取得できており，分析結果の社会的インパクトは大きい。

（3）今後の展望

今後の展望としては，コロナ禍前とコロナ禍中の妊産婦の自殺関連因子という価値あるデータが収集できているため，早急に得られたデータの精緻な分析を進め，論文や書籍にまとめて社会発信していく。加えて，コロナ禍のため，当初予定していた妊産褥婦を対象とした縦断質的調査は叶わなかった。今後は質的調査も実施し，総合的発達モデルの構築を目指したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 田中美帆	４．巻 35
２．論文標題 子どもとの関係構築経験が母親の生と死に対する態度に及ぼす影響	５．発行年 2023年
３．雑誌名 人間学研究	６．最初と最後の頁 10-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 田中美帆
２．発表標題 コロナ禍における産婦のメンタルヘルスと自殺関連因子――パンデミック以前と以後の比較検討から――
３．学会等名 日本心理学会第86回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 田中美帆
２．発表標題 コロナ禍における妊産褥期の自殺関連因子に関する探索的検討――メンタルヘルス，死への恐怖，自殺の対人関係理論における危険因子の視点から――
３．学会等名 日本発達心理学会第33回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 田中美帆
２．発表標題 妊産褥期の死への恐怖と自殺の対人関係理論における危険因子との関連（1）
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 TANAKA Miho
２．発表標題 The influence of mother-infant relationship-building experiences on Japanese mothers’ attitudes towards life and death
３．学会等名 19th European Conference on Developmental Psychology（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 田中美帆
２．発表標題 子どもとの関係構築経験と生と死に対する態度についての探索的検討
３．学会等名 日本心理学会第83回大会発表
４．発表年 2019年

１．発表者名 田中美帆，大塚穂波
２．発表標題 母親の生命観教育に対する態度の影響因についての探索的検討――母親が持つ子どもの死の概念の理解と家庭での「死」に関する会話の頻度に着目して――
３．学会等名 日本心理学会第82回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 櫻井　茂男、大内　晶子	４．発行年 2021年
２．出版社 福村出版	５．総ページ数 264
３．書名 たのしく学べる乳幼児のこころと発達	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関